



大妻多摩中学校

二〇二五（令和7）年度

入学試験問題（第三回）

【国語】

時間 50分

2月2日（日）

【注意事項】

- 1 問題は21ページまであります。
- 2 指示があるまで、この冊子を開いてはいけません。
- 3 答えはすべて、問題の指示に従って解答用紙に記入してください。
- 4 句読点やカギカッコは一字と数えてください。
- 5 ページが抜けていたり、印刷が見えにくい場合には、手をあげて知らせてください。

— 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

1 動物だって勉強している

まずは勉強という言葉の概念を広く捉えるべきだと思います。多くの人は数学や国語のような教科書に書いてあることを覚えるのが勉強だと思っているようですが、そもそもそれが①大きな勘違いです。

人間だけじゃなく、動物だって勉強はしています。たとえば、鳥は飛び方を勉強します。肉食動物は狩りの仕方を勉強します。勉強とは生きていく術を身に付けるということです。勉強しなければ死んじやいます。

人間の子どもだって、おなかをすかせたとき、そのことを親に伝えるためには言葉を発しなければなりません。痛いところがあるのにそれを正確に伝えられなければ、下手すれば死んでしまいます。②言葉を学ぶというのは人間にとって最も基本的な勉強です。

でも人間にとって、勉強にはもっと大きな意味があります。そのことを説明するために、人間がいかにして人間になったのかを考えてみましょう。

人間の祖先であるサル仲間が初めジャングル地帯で暮らしていました。しかし気候変動により突然ジャングルが消滅し、乾燥地帯で生きていかなければいけなくなりました。現在のアフリカのサバンナを思い描けばいいでしょう。草木が乏しいですからA方法がなくなってしまったのです。

生き延びる方法は2つでした。一つはより大きな群れを成して敵の襲撃に備えることでした。これにより「社会」が形成されるようになりました。もう一つは強力な牙や腕力が代わりに、状況を判断し先を見通す能力を身に付けることでした。

だから人間は一人では生きていけないし、「世界にはどういう法則があるのか」とか「これから先、世の中はどうなっていくのか」みたいなことを考えるようになったのです。

② 人間は一人では生きていけないから勉強する

より大きな群れを作り敵の襲撃に備えるようになって、人間は「社会」を形成するようになりました。

「社会」の中では、③「ギブ&テイク」ができれば、メンバーとして認められませんか。「おなががすいた」と訴えて、食べ物をもらったのなら、それと同等かもしくはそれ以上のお返しをしなければなりません。「魚を取る」という目的のために、釣り竿を借りたなら、お返しに取れた魚を分け与えなければなりません。

「ギブ&テイク」に使われるものは何も食べ物や道具など、目に見える物質ばかりではありません。知識や知恵、技術もその対象になります。たとえば動物の生態に詳しい人は、狩人に獲物のいそうな場所を教えることができます。天候に詳しい人は嵐の前触れを感じてみんなに知らせることができます。

ボクはそういう、目に見えないけれど、人に提供すれば喜ばれ、社会の一員として認めてもらえる知識や知恵、技術、経験などを総称して「コンテンツ」と呼んでいます。

(中略)

④ 「コンテンツ」がないということは周囲から必要ないと思われることです。友達もできないでしょうし、仕事にも就けないで

しょう。社会に居場所がなくなることです。たとえ一人暮らしをしていても、自分にそういう「コンテンツ」がなければ、人間は退屈するか、あるいは毎日の変化を読み取れずに、最終的に生きていくことができなくなるでしょう。

そして「コンテンツ」を集めることが勉強する目的の一つだとボクは思っています。

③ 人間は生き残るために知的欲求を発達させた

人間が生き延びるために取った作戦のもう一つは、状況を把握^{はあく}して、先を見通す力を身に付けることでした。だから人間は常に身の回りのあらゆる状況を把握したい。さらには、未来にどんなことが起こり得るのか知りたい。そういう欲求を持っているのです。

知らないことがあると不安で、気持ち悪くてしょうがないわけです。それが人間の持つ知的欲求の原点だろうと思います。それが今や宇宙の果てのことから細胞の中の世界のことまで知りたいという無限の欲求につながっているのです。

これが、人間が勉強をし続けるもう一つの理由です。^⑤人間は勉強せずにはいられない生き物なのです。

4 「やってみたい」こそが「コンテンツ」集めの最強の動機

「コンテンツ」を得る動機は3つしかありません。

1つめは必要性に迫^{せま}られるということです。たとえば学校の勉強はほとんど義務としてやらなければなりません。有無を言わずにやらされるのです。しかたがないから、やるか、という **a** です。2つめは「やったほうがよさそうだから」という **b** です。その「コンテンツ」を手に入れたら今よりいいことがありそうだということを自分が納得している場合です。納得ができないのならやらなくてもいい。そして、3つめは、たとえば損をしても自分は「それが欲しくてしょうがない」という **c** です。義務でも利益でもなく、純粹^{じゆんすい}に「そうしたいから」が動機です。

1つめと2つめの動機は、^⑥ふつう子どもの心には湧^わいてきません。これはしなければならぬとか、しないと損だ、という計算はしないでしょう。だから子どもへの動機付けになりませんね。少なくともボクの場合、1つめと2つめは、勉強をする動機付けには全くなりませんでした。

ボクが勉強をした唯一^{ゆいいつ}の理由は3つめの動機付けです。人間が勉強をせずにはいられない理由、すなわち知的欲求です。これを感じたときにはあらゆるものが「コンテンツ」となり、勉強の対象になります。

いよ」となるのです。

学校教育がなぜ役に立たなくなってしまったか、つまらなくなってしまうたかといえ、マニュアルを読むだけの教育になってしまっているからです。

今の小学生は教科書を読まされて勉強しているわけですね。教科書は文句のつけられない正解ばかりの本ですから、^⑫磨^{みが}いてきた「常識」が試せない世界です。「考え」や「視点」を探る楽しみを排除^{はじき}して、大人の都合で書かれた無機質な本は、いわば「コンテンツ」の抜け殻^{ぬがら}のようなものに感じられるのです。

この苦役^{くえき}に何とか耐^たえなければならぬわけですね。「できるだけ苦労しないで頭が良くなる方法があればいいのに」と子どもたちが思うのは当然です。

ボクも子どものころはそんなことをよく考えました。そしてたどり着いた結論は「幸福な状態でやることは早く簡単に身に付く」ということでした。

(荒俣^{あらまた}宏^{ひろし}「子どもはなぜ勉強しなくちゃいけないの?」〔日経BP〕より)

問1 ―線部①「大きな勘違い」とありますが、では、筆者は勉強をどのようなことだと思っているのでしょうか。①の本文中から十七字で抜き出して答えなさい。

問2 ―線部②「言葉を学ぶというのは人間にとって最も基本的な勉強です」とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 言葉を話すことは人間として当たり前のことなので、子どものころから練習しないと仲間に入れないから。

イ 子どもは大人のまねをして様々なことを学ぶが、一番早くできるようになるのが言葉をしゃべることだから。

ウ 言葉を学ばないと、自分以外の人に状態や思いを伝えられなくて生きていられなくなってしまうから。

エ 言葉を学ばないと他の人や書物から知識や技術を教えてもらえないので、何もできない人間になってしまから。

問3 Aに入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身を隠す イ 肩をすくめる ウ 目をこらす エ 足を伸ばす

問4 ―線部③「ギブ&テイク」とありますが、この意味の説明をしている次の文の空欄に入る適切な言葉を②の本文中から抜き出して答えなさい。

何かを ① なら、または ② なら、それ以上の ③ をすること。

問5 ―線部④「『コンテンツ』がないということは周囲から必要ないと思われることです」とありますが、その理由を本文中の言葉を使って四十字以上、五十文字以内で答えなさい。

問6 — 線部⑤「人間は勉強せずにはいられない生き物なのです」とありますが、その理由を「くから。」につながるように③の本文中から二十六字で抜き出し、その最初と最後の五字ずつを答えなさい。

問7

a

・

b

・

c

 に入る言葉として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- ア 利益の魅力 みりよく イ 消極的な動機 ウ 知的欲求 エ 主体的な欲求

問8 — 線部⑥「ふつう子どもの心には湧いてきません」とありますが、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ふつう子どもは、勉強より遊ぶことのほうが好きなので、親や先生にいくら勉強が大切だと言われても理解できないしやろうとは思わないから。

イ ふつう子どもは、生きていくためには勉強をしなくてはいけないということを本能で知っているので、勉強をするための動機などいらないから。

ウ ふつう子どもは、社会は「ギブ&テイク」であるということを知っているが、勉強をして「コンテンツ」を得ようという動機は持たないから。

エ ふつう子どもは、やりたくないけれど義務だからしかたがないからやるとか、やったほうが自分の得になりそうだからやるといふ計算はしないから。

問9 — 線部⑦「これ」の指しているものを、漢字二字で答えなさい。

問10

⑧ ・ ⑨ ・ ⑩ ・ ⑪

に入れるのに最も適切な言葉を、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上使用しないこと。

ア でも イ ところで ウ むしろ エ つまり

問11

――線部⑫「せっかく磨いてきた『常識』が試せない世界です」とありますが、この説明として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間は、自分の能力や力が実際に役に立つかどうかを試してみたいという欲求があるが、失敗をすると立ち直れなくなる
ことが心配なので、能力や力を試すことがないように十分に準備がされていて安心だということ。

イ 自分で、危険か安心か、正しいか間違いかなどを判断できる能力を磨いてきたのに、教科書は文句のつけられない正解ばかりなので、その能力がどれほど身についているかを試すことができないためつまらないということ。

ウ みんなが安心して社会生活を送っていくためには「常識」というルールが必要で、子どもたちからそれはいたる所で教えられるものであるが、最近「常識」を気にしない人が世の中に増えていて役に立たないということ。

エ 生まれてからずっと、社会のルールとしてやっていいことと悪いことを学んできたが、子どもはまだ完全に覚え切れていないので、何をやっても失敗してしまって大人に助けてもらわないとならないことが悔しいということ。

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、設問の都合上、本文の表記を改めた箇所がある。

わたしのただひとりの親友、雪風も鉄道好きだった。

すごい勢いでどんどん、どんどん美しくなってしまった十二歳の秋以降、わたしには女の友人はまったくできなかった。旭川の郊外というこの古びた地方都市において、美しいということは誉めたたえられるばかりのことではなく、むしろせまるしい共同体の中ではそれは、ある種の、^(注1) 禍々しき ^(注2) 異形の証なのであった。異形の面であるところの青白い美貌をわたしはいつもくもらせて、黒い犬のようにつやつやとしたまっすぐの長い黒髪を腰までたらし、^① 仏頂面で歩いていた。

そしてその町にはもうひとりの異形がいた。雪風であった。

雪風はわたしと同一年の、少年であった。

切れ長のするどい瞳と、薔薇色の頬をしたおそろしく美少年であるところの少年雪風は、女たちに無害な愛玩動物の如く愛された。おとなの女にも。まだおさない女にも。それはまことに美しい異形の面であった。^② 可愛そうな雪風よ。桂雪風というのが彼の名前

であった。わたしと雪風は母どうしが幼稚園の父母会で知り合いであったため、^③ 気のおけぬ幼馴染として長い月日をすごしていた。そしてたがいの顔が十二歳の辺りからゆつくりと異形と化していく様を、確認しあっていた。

雪風のうちは公団住宅のせまい一室で、あまりにも働かぬ父とあまりにもよく働く母、そしてたくさん弟妹がひしめいて、いつも戦場の如くごったがえしていた。くらべて、川村家は古びた一軒家にわたしと老人のふたりだけであつたので、長男であるところの雪風は、よくうちに避難してきた。美しい少年であるのに鉄道好きであるところの彼は、わたしが模型を散らかした薄暗い川村家の居間で、あきるまでだまって遊んでいた。

そのレイアウトの規模は六メートル×五メートル。本線はなんと八系統。ヤードはというと四百両もの収容が可能なのである。地下線、複々線、高架線を配置し、いまは線路の改良を行っている。すばらしき川村七竈の鉄道模型。

「雪風」

と、
④の外から、わたしが呼ぶ。

「七竈」

と、
④の向こうから、雪風が呼ぶ。

「雪風は、来月のお小遣いでどつちを買ったらいと思う？ キハ八兆Mと、81カシオペアα号」

「七竈。ぼくならキハ八兆Mだな。なぜならこつちは新発売ですぐに売り切れる可能性がある。カシオペアαは美しいいつか買うべきだと思うけれど、いまじゃなくてもいい。……だけど、七竈が好きなほうを選べばよいよ。君のお金だ。君はほしいものを手に入れていいんだ」

「うん」

と、わたし。

「うん」

と、雪風。

ふたりのあいだにせかいがくろくろと横たわる。

台所から、いまでは定年退職しほそぼそと年金で暮らす祖父が、わたしのために晩ご飯をつくってくれている音がする。コトコトと鍋が煮えている。魚を煮る甘辛い匂い。とん、とん、とん、と菜をきざむ音。わたしは目を閉じる。手のひらに握りしめるちいさな鉄道の、黒い鈍い存在感。わたしはなにを欲しているのだろうか。少年は、居間いっぱいに広げられた六メートル×五メートルのくろくろとした鉄道模型の向こうにいて、まことに遠い。

わたしたちが通っているのは北海道立旭川第二高校という、ごく普通の公立校であった。地方都市においては強者であるところの俗にいう進学校というもので、わたしたちは生真面目に授業をうけて、生真面目に夕方の部活をこなし、帰宅して自宅にて予習と復習をする。多忙にして潤いのない生活だが、しかし我が校にも、ときどきは、恋愛をする者がいた。ふん。花などどこでも咲くもの

だ。

高二が秋がやってきたころ。わたしは友もいず、歩いているだけでじろと顔を見られ、ときにはいきなりカメラのレンズをむけられてシャッターを切られ怒って脱いだ靴を投げつけたらその靴までもっていかれてしまったりするじつにくだらぬ狂乱の毎日、その日もひとり孤独にうちへの帰路を急いでいた。高校の正門を出て、街路樹の七竈が赤い実をユラユラと揺らすその道をバス停にむかつて早足で歩いていると、背後から「川村先輩」と声をかけられた。それは聞いたことのない少女の声であった。

まことめずらしいこともあるものだ、わたしは振りむいた。

かわいらしい少女が立っていた。オカッパ頭に、点をふたつおいたようなちいさな瞳。こちらを睨む暗い瞳と、彼女の背後にならぶ友人らしき少女たちを見て、わたしは用件を了解した。彼女が口を開く前に、手短に、わたしはこたえた。

「桂雪風とはつきあってません。幼馴染です。幼稚園が一緒で。それでは」

なにか言いかけていた少女は、開いた口を閉じて、ぽかんとしてわたしを見上げた。わたしは一礼してまた歩きだした。

街路樹が揺れている。

少女が追いかけてきた。革靴の立てるちいさな無骨な足音が、近づいてくる。息をはずませて少女は、

「川村先輩！あの……どうして、わたしが聞きたいことがわかったんですか？あなたはエスパー？」

「……そうですよ」

少女の友人たちはついてこなかった。わたしはちらりと少女の名札を見た。一年生だった。緒方みずず、と読めた。少女はわたしのとなりに並ぶと、ちよつと気を悪くしたように、

「うそつき！」

「うそですけど」

「へんな人！美人なのに、頭がおかしいのね！」

「ええ」

わたしは少し意地悪な気持ちになって、

「雪風も美男子ですけど、頭がおかしいですよ」

「そんなはずないです」

「^⑤知らないから恋をしてるのでしょうか？ いまごろ、雪風のところにもあなたを男子生徒に反転したようなつまらない男が行って

いるかもしれない。そして聞うんです。』⑥』とね。その男はわたしのことをなにも知らない。雪風がわたしを鉄道マニアだと

言っても、信じてない」

「先輩、鉄なの？」

緒方みすずはおそれるように眉をひそめ、つぶやいた。それから、^⑦どうやらわたしという年上の女をなめることに決めたらしく、

「鉄道マニアだなんて。みつともない」と繰り返しはじめた。

バス停がゆるゆると遠ざかっていくような感じがした。街路樹の七竈の下を歩いても歩いても、ゆるゆると、着かない。赤いちいさな実がいくつも揺れていた。

「あんなに素敵な男の子がそばにいて、どきどきしないの？ 好きになったりしないの？ 桂先輩も川村先輩のことを好きになったりしないの？ いくら鉄でも、そんなにきれいなんだから」

「……」

わたしはこたえない。^⑧バス停はすごい勢いで遠ざかる。

「桂先輩はかつこよくて、優しくて、すごく素敵。理想の人だわ。ねえ、わたし桂先輩とつきあってもいいですか？ あなたに断ることじゃないけど……。でも、一応」

恋する季節である。緒方みすずは甘い匂いのする少女の声で語りつづけている。恋の季節。秋だが。わたしはこの甘い匂いが苦手であった。

(中略)

「おはよう、雪風」

「おはよう、七竈」

「ホキ二億形を買おうかどうしようかというのが、わたしの今週の課題なのですが」

「なるほど、君が悩んでいるのは穀物を運ぶホッパー車をあのレイアウトに交ぜるのが不自然ではないかということだね。ふうむ」

「どうでしょうか、雪風」

「そうか。今週、お小遣いが出るのだね」

「そうなのです」

「家畜の餌にする玉蜀黍の山を、ビールの材料にする麦芽を運ぶために、冬の大地をひた走る穀物色をした列車。黄金の色」

「ええ、ええ」

赤いマフラーを巻いた雪風と、白いマフラーを巻いたわたしは、よく似た⑨ かんばせをほころばせあいながら早足で歩く。バス停に着くとびたりと足を止め、周りに聞こえぬように、寒さに赤くそまつた唇を同時に閉じる。バス停に並ぶ列はどれも寒そうで、わたしと同じ、学生服に長靴姿の者たちが冷えた手のひらをこすりあわせている。大人たちは分厚いコートを着込んで、北風にも凍りそうな朝刊を開いて読みすすめている。びゅう、と風が吹くたびに牡丹雪が舞い落ちる。街路樹の七竈も、真っ赤な実に雪を重たく乗せて、風にゆっくり揺れている。

振りむいてこちらを凝視するひとびと。その視線からのがれるように、うつむく。

バスがゆらり、とやってくる、わたしと雪風はそっとみつめあい、微笑んだ。⑩ 雪風が誰にも聞こえぬようちいさな声で、列車

のまねをする。

「がたたん」

わたしはおかしくなって、そのまねをする。

「ごととん」

「がたたん」

「ごととん」

「がたたん」

「ごととん」

「がたたん」

「ごととん」

「先輩、おはようございます！」

——あまりに無粋な横やり^{ふすい}に、わたしと雪風は同時にほそい眉をひそめた。雪風の禍々しき異形のかんばせが、怒りにかっと赤くなる。そつと顔を上げると、乗り込んだバスの、わたしたちが立つ場所にほど近い座席に座ったオカッパの女子学生が、わたしに向かつて手を振^ふっていた。

「君の知り合いか、七竈」

雪風が眉をひそめたまま、問う。

「……あなたのせいで知り合いなのですよ、雪風」

わたしは少しだけ嫌悪^{けんお}の気配^{きはい}を漂^{ただよ}わせつつ、こたえる。雪風はああ、と短くうなずく。^(注3)遺憾^{いかん}ながら、互いにこういったこと

にはなれっこなのである。オカッパ頭の緒方みすずは、返事をせぬわたしたちに、聞こえなかったのかと言わんばかりにさらに大きな声で、

「先輩、おはようございます！」

「……おはようございます。後輩」

わたしはそれだけ言うと、くるりと緒方みすずに背を向けた。雪風もそれに倣う^{なら}。背後から「後輩^{なち}って……。ふつう、名前を呼ぶでしょ。やっぱりおかしな人！」と緒方みすずがぶつぶつ言う声が聞こえてくる。

背後から甘い、恋する人の匂いが漂っている。興味をもってわたしの、そして雪風のかんばせをみつめる、無数の目も。^⑪ わたし

は瞳を閉じ、もつと、と願ってさらに強くまぶたに力をこめる。ホキ二億形の黄金色に輝く車体と、たつぷりと詰めこまれた麦の山が揺れながら大地を走るところを想像する。がたたん、と小声でつぶやくと、となりで雪風も、ちいさな声でささやく。

⑫。

（桜庭一樹『少女七竈と七人の可愛そうな大人』〔角川文庫〕より）

（注1） 禍々しき——いまいましい。好ましくない。不吉である。

（注2） 異形——普通とは違う怪しい形・姿。

（注3） 遺憾ながら——残念ではあるが。

問1 — 線部①「仏頂面」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 不機嫌ふきげんな顔つき。
- イ 無表情な顔つき。
- ウ 穏おだやかな顔つき。
- エ 悲しげな顔つき。

問2 — 線部②「可愛そうな雪風よ」とありますが、美しいということがなぜ「可愛そう」だと言えるのか、その理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 周囲から動物のような扱いを受けていたが、やめさせることができないでいたから。
- イ 異形と化していったために、周囲から気味悪がられて差別的な扱いを受けてきたから。
- ウ 美しすぎるがゆえに、周囲から普通の人とは違う特異な存在として扱われていたから。
- エ 雪風の家は複雑な事情を抱えており、いつも戦場のようにつらい場所だったから。

問3 — 線部③「気のおけぬ」とありますが、この言葉の意味として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 気になり合っている
- イ 気をつかい合っている
- ウ 油断えんりょのならない
- エ 遠慮えんりょのいない

問4

④ に共通して入る言葉を本文中からひらがな三字で抜き出して答えなさい。

問5

――線部⑤「知らないから恋をしてるのでしよう？」とありますが、この時の七竈の気持ちとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 雪風が本当は鉄道好きであることを知ったら緒方みすずは幻滅^{げんめつ}するであろうことを予期して満足する気持ち。

イ 雪風について知った風な口をきく緒方みすずに対し、自分の方が雪風とずっと一緒にいるのだと憤^{いらい}る気持ち。

ウ 緒方みすずが雪風に傷つけられることを心配し、雪風のことを悪く言うことで恋^{あきら}を諦めさせようとする気持ち。

エ 緒方みすずが自分の中で勝手にふくらませた雪風の理想像に恋をしている様子をあさはかに思う気持ち。

問6

⑥ に入る台詞として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 川村さんはつきあってるんですか？

イ 川村さんときあわないんですか？

ウ 川村さんときあってるんですか？

エ 川村さんときあってもいいですか？

問7

——線部⑦「どうやらわたしという年上の女をなめることに決めたらしく、『鉄道マニアだなんて。みっともない』と繰りかえしはじめた」とありますが、この時の緒方みすずの心理を説明したものとして最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 美人なのに鉄道マニアであることを心からもったいないと感じており、鉄道の悪口を言うことでなんとかして鉄道趣味をやめさせたいと感じている。

イ 七竈が雪風と一緒に趣味を持っていることが気に入らず、ふたりの共通点を減らすためにもなんとかして鉄道趣味をやめさせたいと感じている。

ウ 自分が嫌いな鉄道を七竈が好きであることを知り、きれいで憧れていた七竈から裏切られたような気持ちになり、急激に嫌悪感が増幅している。

エ 雪風との親密さでは後れを取っているため、鉄道マニアという趣味を七竈の欠点として見下すことで、自分が精神的に優位に立とうとしている。

問8

——線部⑧「バス停はすごい勢いで遠ざかる」とありますが、この表現からは七竈のどのような心情が読み取れますか。「緒方みすず」という言葉を用いて三十字以上、四十字以内で答えなさい。

問9 — 線部⑨「かんばせをほころばせ」とありますが、「かんばせをほころばす」の意味として最も適切なものを、次のア～エの

中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 笑みを浮かべる。

イ 髪をなびかせる。

ウ 視線を送り合う。

エ したいを寄せる。

問10 — 線部⑩「雪風が誰にも聞こえぬようちいさな声で、列車のまねをする」について、次の問いに答えなさい。

(1) ふたりがこのたわむれを行った理由として最も適切なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちの世界に入り込んで、鉄道好きであることを互いに試し合うため。

イ 自分たちの世界に入り込んで、ふたりの仲の良さを周囲に見せつけるため。

ウ 自分たちの世界に入り込んで、自分たちを凝視する視線からのがれるため。

エ 自分たちの世界に入り込んで、緒方みすずに邪魔をされないようにするため。

(2) このたわむれを遮った緒方みすずの行動は批判的な視点からどのように表現されているか、本文中から六字で抜き出して答えなさい。

問11 ―線部⑪「わたしは瞳を閉じ、もっと、と願ってさらに強くまぶたに力をこめる」とありますが、この場面で七竈が鉄道の空想に没頭しようとしたのはなぜですか。二十五字以上、三十五字以内で答えなさい。

問12 ⑫に入る言葉として最も適切なものを、本文中から抜き出して答えなさい。

問13 作品を鑑賞した生徒が意見を伝え合っています。本文をふまえた発言として適切でないものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 生徒A「七竈が本文中で感じている生きづらさは、ひと言で言う『他人との差異』という点から生じている風に取り除けるね。」

イ 生徒B「他人との差異という点でいうと、鉄道好きというのは珍しい趣味であって、七竈本人もその点を気にしている様子が見られるね。」

ウ 生徒C「自分と違うからという理由で他人を否定するのは差別だと捉えられるから、その点において緒方みすずの七竈に対する姿勢は差別的な点が見られるね。」

エ 生徒D「七竈の容姿に注目する人たちに悪気はなさそうだけど、七竈自身はその視線を煩わしく思っている様子を見ると、差異に注目すること自体が相手へ不快感を与えうることがわかるね。」

三

次の各問いに答えなさい。

問1

次の①～⑤の文の――線部のカタカナを適切な漢字に改めなさい。

- ① 都知事選におけるムトウハ層の動きも注目された。
- ② ユウビンキヨクに葉書を買いに行く。
- ③ 東京湾エンガンの環境保全につとめる。
- ④ 自動ソウジユウ技術の発展が著しい。
- ⑤ 一月は大根の出荷がサイセイキをむかえる。

問2

次の①～⑤のことわざの――に入る漢字一字を答えなさい。

- ① 転がる――に苔は生えぬ
- ② ――に群雲花に風
- ③ あとは――となれ山となれ
- ④ ――と正月が一緒^{いっしょ}にきたよう
- ⑤ ――の恥^{はじ}はかきすて

以下余白

